

レヴィ＝ストロースの「客観性」に関する研究

西原, 明史
九州大学教育学部

<https://doi.org/10.15017/2244150>

出版情報 : 九州人類学会報. 19, pp.96-99, 1991-11-20. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :

レヴィ＝ストロースの「客観性」に関する研究

西原明史

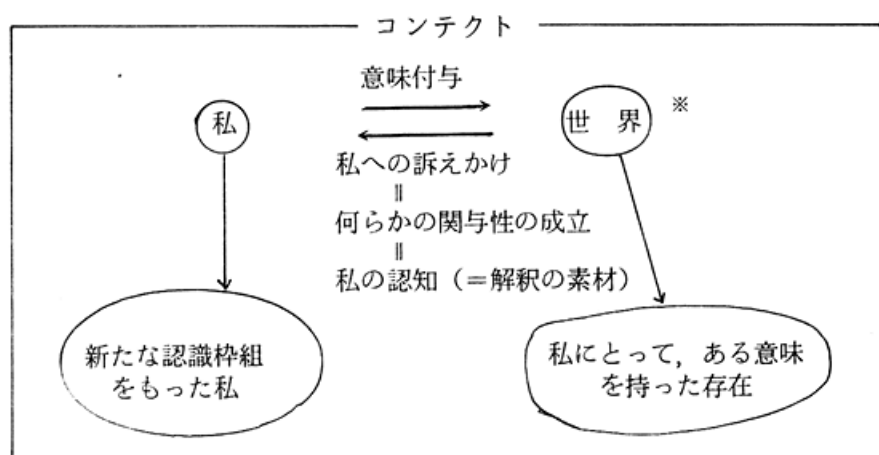
本論文の趣旨は、自分自身の理論理性であった構造主義を、解釈学の立場から批判検討することである。フィールドワークを前に、自分自身の理論的定位を、観念レベルで行ったと言ってもよい。

この、いわば自分による教育分析を、まず構造言語学の「科学性」の検討から始める。構造言語学は、人文科学の中でも特に「科学」的であると言われているが、どこにその根拠はあるのか。構造言語学は、まず言語を、ラングとパロールに分け、後者は個々人の主観的な言語使用、前者を普遍的で客観的な体系とした。ラングは関係論的体系であるので、この関係のあり方を決定できれば、その関係を構成する個々の要素の意味も一元的に決定できる。この関係のあり方がコードであり、コードに従えば誰がみても同じ意味を、個々の要素に見出せる。つまり主観が介在しないことになる。構造言語学は、主観の関与するパロールではなく、客観的なラングを考察の対象にすることにより、「科学」性を獲得したのである。しかしラングは本当に客観的なのか。この根拠は、ラングが関係論的体系であるという所に求められるが、実は、ラングという関係論的体系が所与として存在するのではなく、コードを決定されて初めて関係論的体系になるのでは。従ってコードを発見する手段たる構造分析は、実はコードを発明していると言えよう。つまり、ラングとは、客観的な所与ではなく、研究者によって発明された主観的な存在と言わざるを得ない。従って構造言語学は、いわば擬似科学である。

レヴィ＝ストロースは、構造分析をそのまま人類学のテーマに適用した。このことにより、人類学を「科学」たらしめようとしたわけである。そして、構造言語学が「科学」たりえたのは、対象が「客観的」だったからなので、彼も対象を「客観的」なもの、つまりラングに限定した。まず婚姻の多様なあり方（＝パロール）を、親族関係のみによって規定される女性の交換システム（＝ラング）に環元し、これを考察した。これは「人間の無意識のレベルに、集団の平衡を維持するために女性を交換しなければならないという規則がある」という仮説に基づいている。トーラミズムについては、「それは、自然の種を用いた社会の分類である」という仮説に基づき、社会と自然の各々の分類体系を見つける。それぞれの体系の中で同じ位置を持つもの同士が結びついてトーテミズムが成立したと説明する。最後に神話について。例えば{3→4→6→8}という内容を持った物語があるとして、これを分類し、3:6と4:8に関係づけ、さらに(3:6) = (4:8)と類似関係をつくる。この関係の体系から3と4は1に、6と8は2に環元される。この1:2はコードであり、これに従ってこの物語を読めば、誰もが3=1, 4=2, 6=1, 8=2と同じ意味をつかめる。構造分析によって普遍的な神話の読み方が提供されたのである。

以上のレヴィ＝ストロースの構造分析は、ラングを考察しコードを提出しているのだが、その過程で対象を関係論的体系に環元し、然る後に構造分析を適用している。従って、このコードによって出現する意味は、関係論的体系の枠内での意味である。レヴィ＝ストロースは、対象が関係論的体系である、と無条件に受け入れているが、その保証はないわけで、あくまで仮説にすぎない。彼の提出する意味は、やはり多元的な意味のうちの一つにすぎないのである。

ところで、ものを“見る”という行為は必ず個人の主観が入ることになる。このことを避けるためには、ものを“見ない”で意味をとらえるしかない、この方法が構造主義であった。主体が“見る”ことによって意味が生じるのではなく、対象の中に存在する関係の体系が、関係論的体系を語ってくれる、と考えるのである。これなら主観は介在しないことになる。しかし結局は、構造主義も主観を排除しえなかった。また、構造主義は、関係の体系という唯一の根拠を認めていた。これに基づいて唯一の意味が決定される。しかし現実とは、そのように一元的に決定されるものだろうか。もっと多元的で錯綜したものではないだろうか。しかし、多元的なものを多元的なまま考えていたのでは、論理整合性や一貫性が失われるので、何か一つの根拠に依拠して、一元的なものに還元してしまわなければならない。そういう志向を持つのが「科学」であり、構造主義であろう。しかし、「科学」による一元的な結論は、本来多元的である現実から離反してしまう可能性があるのではないだろうか。なぜなら、日常的な現実とは、何か一つの根拠に従って確固として構成されるのではなく、主体と世界との相互作用の中で構成されるものだからである。



※ 意味付与がなされるまでは、私にとって何の意味も持たない。

このようなメカニズムで「私」が現実を構成していく。現実とは、そこに確固として存在するものではなく、そこに何かがあるという主観的確信、信念から構成されているものである。しかし、これは主観が一方的に構成するのではなく、主観と世界の相互作用の中で、もう、そう意味づけざるを得ない、という状況に追い込まれて初めて構成されるものである。そして、この相互作用のあり方はコンテキストによって常に変化する。従って、現実とはコンテキストによって革新され続けることになる。このように相互作用的に現実が構成されていくからこそ、現実とは多元的になるのである。だから一元的に語ることは、現実からの離反を招くことになる。

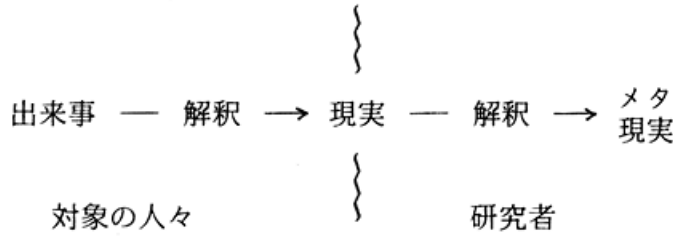
従って、研究者が、現実を説明するためには、この多元的な現実を多元的なまま理解するべきであろう。そのためには、現実を構成している主観的確信の根拠は何なのか、その根拠を基にどのようにしてその確信が成立したのか、ということを考えるしかない。この考察は具体的には、対象となっている人々が現実を構成する相互作用のプロセスを逆にたどることと言ってもいいだろう。

何かはわからないが何らかの関与性をもつ。

||
(根拠)

出来事 - 解釈 → 現実 …… 対象の人々の理解のプロセス
||
現実 …… 研究者の理解のプロセス

これは彼らの意識を無批判的に受け入れるということではなく、そこを出発点にするということ。このことを無視して、自分の仮説だけで現実を環元してはならないのである。そして、実際には研究者が解釈を行う際に、その主観が必ず介在することになる。現実とは、主観と世界の相互作用で構成される以上、研究者のつくりあげる現実も同じことである。ゆえに、完全に客観的に彼らの現実の構成のプロセスを逆にたどることはできない。



このように、結局は研究者にとっての現実をさらにつくりあげているだけかもしれない。しかし、研究者が、フィールドワークのプロセス、データ収集時のあらゆるコンテキスト（日時、天気、場所、相手の表情、態度、自分と相手との関係 etc）を全て解釈の素材として、解釈とその反省をくり返せば、それでもやはりメタ現実の積み重ねにすぎないとしても、少しでも彼らの現実の根拠に近づくことができるのではないだろうか。そして、この過程で、彼らがどのように現実を構成していったのかを理解できるかもしれない。このような手順をふんで、対象の人々の解釈を解釈することが、研究者のなすべきことではないだろうか。さらに、この手順を、そのまま民族誌として記述することが肝要である。民族誌は、人類学者のフィールドにおける経験と、その解釈を語る場であるが、そのうえに、自分の理解へ至る全ての素材、プロセス、解釈の理論、その適用の仕方まで、余す所なく併記する。このことにより、民族誌としての論理整合性や一貫性は犠牲にされるかもしれない。しかし、このことにより、さらなる再解釈のために聞かれている民族誌となり、自分にとっても読者にとっても、より理解を深められることになる。そして説得力のある語りができるのではないだろうか。

以上、現実理解にとっての構造主義の限界の指摘と、それに代わる理解のあり方を検討してきた。しかし、これは構造主義の否定ではない。「構造」に依拠した現実もまた多元的な現実の中の一つとして存在するわけで、それを標準的な現実として、多元さの程度を考察するために積極的に活用できるのである。つまり現実理解の一助として「構造」を位置づけることができる。このように、現実を一元的におしこめ、それ以上の理解を止めてしまう道具としてではなく、現実の多元性のより深い理解のための一つの過程として構造主義を適用していきたいと考えている。

参 考 文 献

河本 英夫 1984, 「自然の解釈学」, 海鳴社。
 久米 博 1978, 「象徴の解釈学」, 新曜社。
 谷川 渥 1984, 「構造と解釈」, 世界書院。
 ブルデュー, P. 今村 仁司 (訳), 1988, 「実践感覚」, みすず書房。

リクール, P. 久米 博他 (訳), 1985, 「解釈の革新」, 白水社。

Leach, E. 1970, *Claude Lévi = Strauss*, The University of Chicago Press.

Pace, D. 1983, *Claude Lévi = Strauss*, RKP.